



M.M.Honcho Newsletter

【11月号】令和8年10月30日発行

▼WEB PAGE



▼e-mail



行動の先にある「思い」を価値付ける

副校長 森 圭一郎

木々の葉が色付き始め、秋の深まりを感じる季節となりました。保護者の皆様におかれましては、日頃より本校の教育活動に温かいご理解とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

さて、日々の学校生活の中で、私たちは子どもたちの頑張りやよい姿を認め、ほめ、励ます機会が多くあります。その際、私たちが大切にしたいと考えているのが、単に「ほめる」にとどまらず、その行動の根底にある思いや思考を「価値付ける」ということです。

先日、学校外での会議のために正門を出ようとした際、ちょうど下校時刻で5年生のある学級がピロティに並んで、壁を背に担任の話を聞いているところでした。

私が、子どもたちが背にしている壁にある正門の開錠ボタンを押そうと近づいたところ、声を掛ける前にずっと前にずれて道を空けてくれた子がいました。さらに別の子がそっと開錠ボタンのふたを開けてくれました。

思わず胸が温かくなる姿でした。私が嬉しく感じたのは、「前にずれる」「ふたを開ける」という目に見える行動そのものだけではありません。

「副校長先生が外に出ようとしている」「ここにいたら邪魔になるかな」「ふたを開けてあげたらボタンを押しやすいかな」と、相手の立場に立って次の状況を予測し、自分にできることを考え、自発的に行動を起こした子どもたちの「思考や優しい気持ち（心持ち）」に深く感銘を受けたからです。

表面的な行動をほめることも大切ですが、子どもはその特定の場面で行動することに満足して終わってしまうかもしれません。

しかし、「なぜその行動がよいのか」という行動の根底にある子どもの心持ちや思考に目を向け、そのよさを言葉にして伝える（＝価値付ける）ことで、子どもたちは自分の行動の意味を深く理解し、行動そのものより心のもちように意識を向けることができます。

具体的な場面から一步踏み込んで抽象化された「心持ち」を共有することは、学びや生活の他の場面へと広がっていきます。たとえば、電車の中で体の不自由な方やお年寄りのことを考え席を譲ったり、通り道を空けたりするなど、別の具体的な状況においても自ら考えて行動できる姿へとつながっていくと考えられます。

学校では、学校教育目標をいう高度に抽象化された目標を具体の子どもの姿で捉え直し全ての教育活動を学校教育目標につなげて実践することを研究してきています。ここで大切にしていることは「具体と抽象の往還」です。具体的な行動を抽象化して価値付け、さらに別の具体的な行動変容につなげていくことを目指しています。

自分以外の誰かの立場に立ち、今できる優しさを形にしようとする子どもたちの姿は、学校全体の温かい雰囲気をつくる大きな原動力となります。そしてそのことは、子どもたち一人ひとりが安心して生活し学んでいく土台になります。

これからも教職員一丸となって、子どもたち一人ひとりの行動の先にある「中身」や「思い」に寄り添い、丁寧な価値付けを重ねながら、豊かでしなやかな心を育ててまいります。

引き続き、皆様の温かいご理解とご支援をお願い申し上げます。